

平成 30 年 5 月 28 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K16749

研究課題名(和文)素性継承システムのパラメータ化に基づくV2現象の共時的・通時的研究

研究課題名(英文)The Parameterization of Feature Inheritance and the Synchronic and Diachronic Study of the Verb-Second Phenomenon

研究代表者

三上 傑(MIKAMI, SUGURU)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・講師

研究者番号：60706795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、いわゆる「V2現象」に関する共時的・通時的研究を通して、Miyagawa (2010)により提唱された素性継承システムのパラメータ化の妥当性を立証することを試みた。具体的には、V2語順が焦点卓越言語タイプの統語システムの下で理論的に許容されることになる非主語要素のTP指定部へのA移動とV-to-T移動の適用を介して派生されるとする新たな分析を提案した。そして、英語では後期中英語期から初期近代英語期にかけて、いずれの移動も消失したという言語事実に基づき、英語の統語構造が当該時期に焦点卓越言語から現在の主語卓越言語にパラメータ変化を起こしたということを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study has validated the parameterization of feature inheritance advocated by Miyagawa (2010) through the synchronic and diachronic investigation of the so-called "V2 phenomenon." More specifically, the study has proposed a new approach to the linguistic phenomenon, in which the V2 word order is derived through both the A-movement of a non-subject element to the Spec of TP and V-to-T movement, which are considered appropriate in the syntactic system of Focus-prominent languages. Furthermore, focusing on the historical fact that both the movements were lost in the Late Middle English and Early Modern English periods, it has proven that the English syntax underwent a parametric change from a Focus-prominent language to a Subject-prominent language.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：V2現象 素性継承システムのパラメータ化 Strong Uniformity 共時的研究 通時的研究

### 1. 研究開始当初の背景

Chomsky (1981)により、自然言語はすべての言語に共通する原理と言語間で変異するパラメータから構成されるという原理とパラメータ・アプローチが提案されて以来、この枠組みでの比較統語論研究により、現在まで理論的・経験的に重要な多くの貢献が理論言語学分野にもたらされてきたことは言うまでもない。この見方に従えば、同一言語における史的变化も、そのパラメータ値の変化に伴う言語タイプの変化として捉えられることになり、現代語を対象とする共時的研究との間で、統一的な観点から比較・対照研究を行うことが可能になる (cf. Fischer et al. (2000), Roberts and Roussou (2003), etc.)。

しかしながら、これまで提案されてきたパラメータの多くは、その妥当性が共時的観点か通時的観点のいずれかによってのみ立証されてきており、両観点から十分な検証がなされ、両研究分野の知見が融合した形の統語システムの解明には至っていないのが現状である。

このような理論的背景に鑑み、現代語を対象とした共時的研究において妥当性が立証されてきているパラメータを通時的研究に適用し、同一言語内の史的变化もそのパラメータ値の変化として捉えることで、共時的多様性と通時的变化を同一視座で捉えられる、より説明力の高い言語理論を構築しようとする試みは非常に意義があるものと考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、Miyagawa (2010)により提唱された素性継承システムのパラメータ化に基づく言語理論の妥当性を共時的・通時的観点から多角的に立証することにある。

本パラメータは、C から T へ Phi 素性と焦点素性のいずれの素性が継承されるのかに応じて、自然言語を主語卓越言語 (Subject-Prominent Language) と焦点卓越言語 (Focus-Prominent Language) に二分するものであるが、これまでは主に、現代英語と現代日本語に関する共時的研究を通して妥当性が立証されてきた。本研究では、それを英語の構造変化を扱う通時的研究に適用し、一連の変化を当該パラメータに関する値の変化として捉えることを試みる。そして、そこから得られた知見をもとに、V2 現象を示す多くの現代語を対象とした比較・対照研究を実施し、その言語現象に関する通時的变化と共時的多様性を同一視座で捉える可能性について探る。また、本理論的枠組みから得られる理論的含意と経験的帰結についても幅広く検討を加える。

### 3. 研究の方法

本研究では、素性継承システムのパラメータ化に基づく言語理論を、通時的な変化と共

時的な多様性を同一視座で捉えられる、両研究分野の知見が融合した理論へと発展させるという最終目標に向けて、研究をより着実に遂行するために、研究テーマを以下の三点に絞った。

#### [1] 英語の統語構造における史的变化に関する考察：

古英語と初期中英語が示していた V2 現象が後期中英語期から初期近代英語期にかけて衰退したという史的变化について考察を進め、素性継承システムのパラメータ化の下で史的变化を捉える可能性を探る。

なお、データの収集に際しては、先行研究で取り上げられているデータに加えて、初期中英語期の文献 (具体的に Canterbury Tales と Mandeville's Travels) と後期中英語期の文献 (Paston Letters) を実際に講読し、V2 現象、とりわけ、LIC 語順 (Location (PP)-V-Subject (NP)) 及び There 構文について、当該構文が使用される文脈及び生起可能な動詞のタイプ等を詳細に比較・検討することで、幅広い情報の収集と整理を試みる。

#### [2] 現代語を対象とした言語の多様性に関する考察：

[1] で得られた知見をもとに、V2 現象を中心に、多くの現代語を対象とした比較・対照研究 (具体的にはドイツ語及びバンツァー諸語) を実施し、素性継承システムのパラメータ化の下で同一言語内の史的变化と言語間の多様性を同一視座で捉えることのできる可能性を探る。

#### [3] 当該理論の理論的含意と経験的帰結の検討：

Chomsky (2007, 2008) により提案された素性継承システムをパラメータ化させることで、言語の多様と言語変化を捉えようとする試みは、検討され始めたばかりのプロジェクトである。そのため、当該理論の理論的含意と経験的帰結については、依然としてその多くが解明されていないものと思われる。

### 4. 研究成果

各年度別の研究成果は、以下のようにまとめられる。

#### 【平成 27 年度】

当該年度は主に、英語における V2 現象の史的变化に関する考察を進め、素性継承システムのパラメータ化の枠組みの下で同一言語内の通時的变化を捉える可能性について探った。具体的には、LIC 語順 (Location (PP)-V-Subject (NP)) に焦点を当て、それが使用されている文脈や生起可能な動詞のタイプについて、初期中英語期の文献 (Canterbury Tales 及び Mandeville's Travels) を調査した。現代英語では特殊構文として位置付けられている LIC であるが、V2 現象が許されてい

た初期中英語期には、現在の LIC と比べて幅広い文脈で使用され、様々なタイプの動詞と生起していたことが観察され、当該構文の特殊構文としての機能は当時まだ確立されていなかったことが明らかとなった。そして、その特殊構文化は、後期中英語期に英語の統語システムが焦点卓越型から主語卓越型へパラメータ変化したことにより、V2 現象の衰退とともに生じたという分析を提示した。

また、主語卓越言語と焦点卓越言語という言葉区分で自然言語の普遍性と多様性を捉えた場合の理論的含意についても考察し、当該パラメータが、T の有する EPP 素性の満たし方に加え、Minimality の計算システムや (strong) Phase の形成システムに関しても、両言語タイプ間にパラメータの相違をもたらすことを明らかにした。これに従えば、現代日本語をはじめとする焦点卓越言語では、非主語要素の主語要素を越えての A 移動や定形節境界を越えての長距離 A 移動等、主語卓越言語では決して許されることのないタイプの A 移動の存在が予測されることになる。この予測に関して、日本語の長距離スクランプリングが示す「A 移動」特性の存在を明らかにした上で、当該枠組みの下、それらの事実に対して原理的な説明を与えた。

#### 【平成 28 年度】

当該年度は、前年度に引き続き、英語における V2 現象の史的变化に関する考察をさらに進め、素性継承システムのパラメータ化の枠組みの下で同一言語内の通時的変化を捉える可能性について検証を行った。具体的には、英語史における V2 現象と V-to-T 移動の消失時期のずれに着目し、英語の統語構造は後期中英語期から初期近代英語期にかけて焦点卓越型から主語卓越型に段階的にパラメータ変化を起こしたと分析した。そして、その変化の過渡期には両タイプの特性が組み合わさった「ハイブリッド型」の統語構造を有していたという可能性を提示し、その妥当性を立証した。

また、主語卓越言語と焦点卓越言語という言葉区分で自然言語の普遍性と多様性を捉えた場合の理論的含意についても引き続き考察した。そして、定形節のフェイズ性に関する日英語の違いが、日本語で観察される定形節内からの抜き出し操作を可能にしていることを明らかにした。本分析により、当該現象が、前年度の研究で明らかにした日本語における A 移動タイプの長距離スクランプリングと統一的な説明を与えることが可能となった。

さらに、本研究課題により得られた英語における統語構造の通時的変化に関する知見をもとに、日本語の通時的変化を対象とした対照研究にも着手した。日本語における「係り結び」現象の消失を手掛かりに、日本語でも英語の場合と同様に、(強い)焦点卓越型から統語構造が変化してきているという分

析を提示し、焦点卓越型から主語卓越型へのパラメータ変化という方向性が自然言語に共通してみられる普遍的なものであるという可能性を明らかにした。

#### 【平成 29 年度】

当該年度は、前年度実施した日本語における統語構造の通時的変化に関する研究から得られた知見をもとに、英語における統語構造の通時的変化に関して、その変化過程を精緻化することを試みた。具体的には、平成 27 年度に実施した研究において、英語の統語構造が後期中英語期に焦点卓越型から現在の主語卓越型へパラメータ変化したことをすでに明らかにしているが、当該年度はそのパラメータ変化以前の古英語と初期中英語に注目した。そして、日本語の統語構造における通時的変化と同様に、英語の統語構造も後期古英語期に「強い」焦点卓越型から「弱い」焦点卓越型にパラメータ変化を起こしたという仮説を提示し、この仮説の下、英語における There 構文の段階的発達が適切に捉えられることを示した。また、焦点卓越言語から主語卓越言語への言語タイプの変化という方向性が、日英語で共通して観察される、かなり普遍的なものであるという可能性についても明らかにした。

さらに、素性継承システムのパラメータ化と Strong Uniformity の観点から自然言語の普遍性と多様性を捉えた場合の理論的含意についても、前年度から引き続き考察を進めた。とりわけ当該年度は、C から T へ焦点素性が継承される焦点卓越言語では Phi 素性を介した文法的一致現象が CP 領域内で生じるという理論的予測に基づき、日本語における主語尊敬語化現象や、重複可能形表現や重複命令形表現といった言語表現が、焦点卓越言語タイプの Phi 素性一致現象として分析されることの妥当性について立証した。本研究により、当該理論的枠組みが、これまで生成文法理論ではあまり議論されることのなかった日本語学の知見をも積極的に取り込むことができるということが明らかになった。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 6 件)

[1] Mikami, Suguru. (2018) “The Passivization of the Gesture Expression Construction and the Formulation of Subjects in Terms of Aboutness,” *JELS* 35, pp.259-265, 査読無。

[2] Mikami, Suguru. (2017) “Two Types of Focus-Prominent Languages and Diachronic Change in Japanese Syntax,” *Tsukuba English Studies* 36, pp.1-21, 査読有。

[3] 三上傑. (2017) 「素性継承システムのパラメータ化と英語史における統語システムの段階的变化」, *JELS* 34, pp. 91-97, 査読無.

[4] Mikami, Suguru. (2016) "Two Types of Long Scrambling in Japanese as a Focus-prominent Language," 『国際教養学部論叢』 8 (中京大学), pp.75-96, 査読無.

[5] 三上傑. (2015) 「英語の A 移動現象に見る統語と談話のインターフェイスの変遷: 焦点卓越言語から主語卓越言語へ」, 日本英文学会東北支部第 69 回大会 Proceedings, pp.132-133, 査読無.

[6] 三上傑. (2015) 「焦点卓越言語としての古・中英語と英語史におけるパラメータ変化」, 日本英文学会中部支部第 66 回大会 Proceedings, pp.184-185, 査読無.

〔学会発表〕(計 7 件)

[1] 三上傑. 「焦点卓越言語としての日本語における Phi 素性一致現象とその特異性」, 日本語文法学会第 18 回大会パネルセッション『重複表現の形態・統語的分析と語用論的機能』, 筑波大学(茨城県・つくば市), 2017 年 12 月 3 日.

[2] 三上傑. 「焦点卓越言語としての日本語と主語尊敬語化」, 日本英文学会東北支部第 72 回大会シンポジウム『形式と機能の両面から見た言語の姿: 語・文・談話レベルの分析から日英語の言語的特徴を考える』, 東北大学川内キャンパス(宮城県・仙台市), 2017 年 12 月 2 日.

[3] 三上傑. 「焦点卓越言語の二分類と英語史における統語構造の段階的变化」, ワークショップ「コーパス・多人数質問調査からわかる言語変化・変異と現代言語理論」, 東北大学青葉山キャンパス(宮城県・仙台市), 2017 年 8 月 29 日.

[4] Mikami, Suguru. "The Passivization of the Gesture Expression Construction and the Formulation of Subjects in Terms of Aboutness," *ELSJ 10th International Spring Forum 2017*, 明治学院大学白金キャンパス(東京都・港区), 2017 年 4 月 22 日.

[5] 三上傑. 「焦点卓越言語としての日本語における定形節のフェイズ性」, 言語学ワークショップ『日本語統語論研究の広がり—理論と記述の相互関係—』, 筑波大学東京キャンパス(東京都・文京区), 2017 年 3 月 27 日.

[6] 三上傑. 「素性継承システムのパラメータ化と英語史における統語システムの段階的变化」, 日本英語学会第 34 回大会, 金沢大

学(石川県・金沢市), 2016 年 11 月 13 日.  
【大会優秀発表賞(佳作)受賞】

[7] 三上傑. 「2つのタイプの焦点卓越言語と日本語における統語構造の通時的変化」, 『三層フェスタ』プレワークショップ: 若手が拓く言語研究の新領域, 筑波大学(茨城県・つくば市), 2016 年 9 月 29 日.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三上 傑 (MIKAMI, Suguru)  
東北大学・高度教養教育・学生支援機構・  
講師  
研究者番号: 60706795